

陸上運動部部便り

2005 年 7 月号

第 7 4 回日本学生陸上競技対校選手権大会

目 次

1	日本学生陸上競技対校選手権大会	1
1.1	監督の言葉	1
1.2	主将の言葉	1
1.3	選手の言葉	1
1.4	試合経過	2
1.5	試合結果	2
1.6	主務より	3

1 日本学生陸上競技対校選手権大会

1.1 監督の言葉

日本学生 監督 八田 秀雄
日本インカレは7月1-3日国立競技場で行われました。出場は10000mWの春木と400mHの塩入の二人で、少し寂しい状況でした。2日の塩入はまずまずのできで、62.99。他の種目と同様に準決勝があれば、もう一本走れた所でした。春木は3位集団にずっとつけ、7000mで集団がばらけても落ちることなく、4-5位あたりで歩きわくわくさせてくれました。ただし失格が多く、春木も歩型が崩れてきた感じで、9600mで失格。しかしその攻めの姿勢は素晴らしかったと思います。

1.2 主将の言葉

主将 米田武史
今年の全日本インカレには2名の選手が出場しました。今回は人数は少ないものの、十分な結果を期待して部員一同も応援に参加させていただきました。結果だけ見れば予選落ちと失格でしたが、善戦がそれ以上のものを見ている人に与えたい試合を選手にはしてもらいました。

もう七大戦まで残り一ヶ月を切りましたが、今は七大戦に向けて部全体が異様なまでに盛り上がっております。博多の森での戦いを期待しつつお待ちくださいますよう、お願いいたします。

1.3 選手の言葉

男子 10000mW 春木洋輔 (M1 年)

想定していた通りの理想的な展開でレースを進めながら失格となってしまう、惜しいという気持ちもありますが、これまでの練習の流れから調整、レース展開まで含め、現状での最善を尽くした結果なので納得しています。最後は練習量の不足が露呈して力が及びませんでした。今まで夢でしか無かった表彰台にあと一步というところまで迫ることが出来、とても楽しいレースでした。今回のような勝負を意識したレースがあと何回出来るか分かりませんが、戦う気持ちの続く限り、少しでも上を目指して競技を続けていきたいと思います。応援ありがとうございました。

女子 400mH 塩入敦子 (5 年)

5年目の一番の目標としていた試合が終わりました。望んでいたような最高の結果は残せませんでしたが、7年間取り組んできた400mHの最後の試合を、日本インカレという舞台で迎えることができ、幸せでした。

入部から今日まで4年間、と、おまけの数ヶ月間。初めは夢のようだった日本インカレを目指し、練習に取り組んできました。恵まれた練習環境、競い合える良きライバルやチームメイト、先輩方からの温かいご

声援、そしていつも応援してくれた家族…。様々な後押しのおかげで、インターハイに出ることすらできなかった私が、インカレで勝負するまであと一、二歩のところまで成長することができました。最初は手の届かないくらい大きな目標も、諦めず、決して見失わなければいずれ近づくことができるのだと実感できました。八田監督の言葉を借りるならばやればできる、です。後輩の皆さんにも、この思いを持って競技に取り組んでほしいと思います。最後になりましたが、日本インカレに向けて、多くの皆様から温かい励ましや力強い声援をいただき、本当にありがとうございました。卒業まであと少し、もう一花咲かせて皆様に恩返しができるよう頑張ります。

1.4 試合経過

トラック 2 日目 (7/2)

12:45 女子 400mH 予選

3組3レーンに塩入(5年)の出場。予選6組で、各組1着と記録上位2名の決勝進出と厳しい条件の予選だった。序盤スピードをおさえて入ったが、抑えすぎたのか周りから少し出遅れてしまう。後半になって徐々に前を抜いていくが先頭を走っている実力者との差は大きく、最後にかなりつめたものの5着62"99で。9月卒業の塩入にとっての学生最後の400mHが終わった。

トラック 3 日目 (7/3)

13:10 男子 10000mW 決勝

関カレ2部優勝の感動も記憶に新しい、春木(M1)の出場。今回は本人の絶好調宣言も飛び出し、応援席の期待も否が応にも高まった。レースは、世界選手権代表の順大山崎・森岡、京大杉本の3人が序盤で後続を引き離し、残りの25人がその後方で大集団を形成する展開に。集団のペースは4分20秒程度で、43分37秒1の自己記録をもつ春木にとっては絶好のものだったが、集団内でやや足が詰まり気味であり、周囲と

接触するシーンも何度かあって、消耗が心配された。しかし、5000m過ぎで集団が2つに割れると、すかさず前の集団に取り付き、さらに加速して順位を上げていく。このあたりの勝負勘はさすがである。トップ集団の京大杉本は2400mで早々に失格しており、春木はこの集団を制すれば表彰台となるだけに、応援席は俄然色めき立った。そして7000mでは、ついに4番手に上がる。だがこの時点で警告も2枚。つかみかけた表彰台の夢を実現するために、一か八かの勝負を強いられることになる。その後も春木はペースを落とすことなく3番手を狙える位置で周回を重ねたが、やはり審判の求める技術の水準は高く、ついに9600mで、残りわずか1周を残して無情の失格となってしまった。このように結果は残念なものであったが、春木が間違いなく全国の舞台で通用する選手であることを、誰もが確信した試合であった。

1.5 試合結果

第 74 回日本学生陸上競技対校選手権大会

於 国立霞ヶ丘競技場 (H17.7.1-3)

男子 10000mW 決勝

1	森岡紘一朗	順大	41'56"15
2	山崎勇喜	順大	42'43"00
3	高橋浩輔	東洋大	43'50"06
4	北村裕規	広大	44'06"42
5	玉山真一	岩手大	44'08"44
6	桶谷昌弘	国士大	44'29"64
7	北平克浩	山梨学大	44'37"55
8	黒田裕史	国士大	44'48"47
-	春木洋輔	東京大	DSQ

女子 400mH 決勝

1	桜井里佳	福岡大	57"42
2	青木沙弥佳	福島大	57"89
3	石野智恵子	順大	59"03
4	澤田実希	福岡大	60"45
5	西尾千沙	東学大	60"97

6	田村真梨子	愛教大	61"48
7	杉山佳美	甲南大	61"54
8	宮崎加奈子	筑波大	61"78

女子 400mH 予選 (1 着+2)

3 組

5	<u>塩入敦子</u>	東京大	62"99
---	-------------	-----	-------

1.6 主務より

全日本インカレの応援に駆けつけてくださった OB・OG の方々を卒業年順に敬称略でご紹介いたします。ご多忙のところ、誠にありがとうございました。

<全日本インカレ二日目・7月2日(土)>

2003 年卒 松林武生
2004 年卒 高見康裕
2005 年卒 藤田靖浩
2005 年卒 本多剛
2005 年卒 山中邦夫

<全日本インカレ三日目・7月3日(日)>

1988 年卒 寺田秋夫
2001 年卒 新妻拓弥
2004 年卒 石井康雄
2004 年卒 岡本泰英
2004 年卒 岸田陽子
2004 年卒 高見康裕
2004 年卒 田坂和彦
2005 年卒 深瀬剛正
2005 年卒 本多剛

文責：中原健二